

【全体講演】

演題：食を学ぶのか？ 食で学ぶのか？ ～子どもたちの“できる”を伸ばす食育～

講師：比良松 道一 氏（九州大学 持続可能な社会のための決断科学センター准教授）



農学博士。研究室の女子学生が始めた『弁当の日』に参加し、『食育』に目覚める。当時、保護者会会長を務めていた、宗像市立河東小学校学童保育において、即、弁当の日を実践。共働き家庭やひとり親家庭を中心とした現代の「共同の子育て」を充実するうえで、弁当の日が大変有効な方法であることを実証した。

現在、『人も生き物も‘持ちつ持たれつ’』をキーワードに、食・環境・子育てに関する講義、講演活動、ワークショップを展開中。

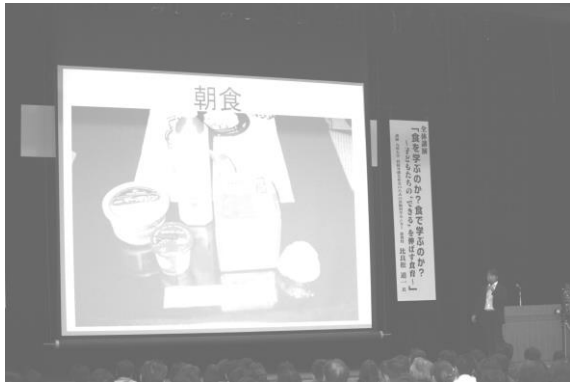
皆さんこんにちは。九州大学の比良松と申します。よろしくお願いいたします。今日の私の演題は、「食を学ぶのか？食で学ぶのか？」という皆さんへの問いかけです。

皆さん、食べ物にご関心のない方は、ほとんどおられないだろうと思います。皆さん毎日ちゃんと食べていらっしゃると思います。その毎日、日々食べている食べ物を通して、皆さんたちがどんな世界を見ているかということを、この1時間で考えていただければと思います。できれば今日、私の話を1時間ちょっと聞いてみて、もし気に入っていただけたら、是非一人でも多くの方にそのことを伝えていただきたいと思っていますし、また、自分でできることを何か一つでもいいから実践していただければと思っています。

『木を見て森を見ず』これは、私が大学で授業をするのに一番影響を受けた言葉です。実はこれは、熊本県の方が言われた言葉なんです。皆さんご存知ですか。熊本県に菊池養生園という公立の病院があるんですけども、その院長先生が言われた言葉なんです。命のことを知りたければ、食べ物のことをちゃんと学んで下さい。食べ物のことを知りたければ、それを支えている農業のことをしっかり学んで下さい。農業のことを知りたければ、それを支えている自然のことをちゃんと学んで下さい、というメッセージです。命も食べ物も農業も、それから自然も全部つながっているんですよ。一つ一つのことを切り離して考えることはできませんよ。そういうメッセージです。

私はこの言葉を聞いた時に、自分は農業の専門家で、今まで農業のことばかり研究していたのですが、やっぱりもう少しちゃんと勉強しなきゃいけない、と心を新たにしました。皆さんも聞いたことがあると思いますけれども「専門バカ」という言葉があります。そのことだけは知っているけれども、それ以外のことはあまり詳しくないという状況。これはまさに森全体が見えてない状況だと思っているんですが、まさに私自身が、研究していた頃はそうだったと思っています。それぞれの職業でプロフェッショナルな方っていらっしゃると思いますが、それ以外のことについてどれだけのことをちゃんと分かっているだろうかということを、普段から考えなきゃいけないだろうということなんです。

そういう気持ちになってから、農業だけでなく命の問題だとか食べ物の問題だとか、それから環境の問題に気づけるようになってきました。このことは、私自身の大学での教育にももの凄く影響を与えます。九州大学はすごくたくさんの学生がいるんですけども、その大学生たちと色々話をしたり授業をやったりしていても、農業を大切にしてほしい、日本の農業を特に大切にしてほしいな、と若い学生たちに対して思っているんですが、なかなか「しっかり伝わったぞ」という実感が持てないのです、私自身。そういう何かモヤモヤとした気持ちの中で、やはり教育自体も、結構チグハグなことが多いと思うようになりました。そういう体験談をちょっとお話しして、本題に入りたいと思います。



小学校や中学校に呼ばれることがたくさんあって、100 校以上行ったと思います。小学生を相手にする時は、できるだけ楽しくやりたいと思っていますので、「みんな、今日の給食おいしかった？」と聞くんですね。「手を挙げて」というと、みんな「絶対おいしいに決まってるやん」みたいな感じで手を挙げるんです。「おいしかった!!」と言ってですね。今の給食は本当においしいんですよね。私も、娘の通っていた学校で PTA 会長をやっていた時代があって、その中で学校給食をいただく機会がたくさんあった

んです。私の小学生の時代に比べると、はるかに給食はおいしいと思いました。

そういう給食をいただいている子どもたちですから、「おいしかった!!」と元よく言ってくれるんですが、その子どもたちに対して私が「あなたたちはなぜ食べるんですか？」と問いかけます。私は博多の人間ですので、博多弁で「なんで食べると？」と聞きます。「なんで食べると？」と聞くと、子どもたちからいろんな答えが返ってくるんですが、一番多い答えがあります。皆さん想像できますか？子どもたちの気持ちになって考えてください。子どもが、この問いに関して一番多く答える答え、たくさんあった中でとても面白い答えが沢山ありました。例えば、私が北九州の市内の小学校に行って 5・6 年生に話をした時に、一番前にすごく落ち着きがなくて、ずっとお喋りしている男の子がいたんです。5 年生でした。ずっとお隣の友達の方を見てペチャクチャペチャクチャ喋って、全然こっちを見てくれないんです。こっちは一生懸命話しているのに。

だから、そのお喋りを止めようと思って、「ねえ、ねえ、君。名前なんて言うの？」と聞いたんですよ。仮に「中村」といったとしましょう。「中村君、なんで食べると？給食食べたやろ？なんで食べると？」と聞いたんです。そしたら、その子が間髪入れずに、「お箸です」。小学生は絶対ストレート勝負ですから直球しか投げないです。思ったことをそのまま言葉に出して言う。ここが本当に私は小学生くらいの年頃の子どもたちの素晴らしいところだと思っているんです。大人は何かこうオブラートに包んでというか、大人だとこんなふうには答えなきゃいけないんじゃないかと思って、色々言葉を操るんですけど、子どもは思ったまんま、絶対に変化球は投げないです。

それで、その子が周りの友達から笑われてしまって、自分が勘違いしていたということにすぐ気づいて言い直した答えが、小学生が一番多く答えたものです。「お腹が空くから」と言い直しました。「そんなの当たり前やん。ねえ」小学生が言うんです。確かにそうかもしれない。「でもさ」と言うんですよ。「私は、今まで 100 校以上の学校に行ったんだけど、皆が今言った『お腹が空くから』という答えを言わなかった学校が 2 校だけあります」という話をします。たった 2 校ですよ。

そのうちの 1 つの学校が、鹿児島県枕崎というところにあります金山小学校。全校生徒 18 人しかいない学校に呼ばれたんです。授業をやって下さいと。1 年生から 6 年生までの 18 人に授業をやったんですけれども、その時に同じ質問をしたら、その学校の子どもからは一人も「お腹が空くから食べるんです」という答えは出なかったんです。感心しました。その中にいた 6 年生の女の子に「じゃあ、最後に 6 年生のお姉ちゃんに代表して聞いてみよう。お姉ちゃんだったらなんて言うかな」と言って、「どうぞ」と言ったら、その女の子がこう言ったんです。「私たちは食べることによって長生きができるから、だから食べるんです」と言ったんです。私はこんな大人びた答えが小学生から聞けるとは思っていなかったんで感心しました。「すごいね」と言ったら、前の方に座っていた 2 年生の女の子が「はい」と、「はい、私まだあります」と手を挙げるんですよ。もう 6 年生が言ったのでとりあえず止めようと思っていたんですが、2 年生が「まだあります」って言うから「そう、まだあるの。じゃあ、ちょっと言ってみて」と言わせたんです。そしたらこう言いましたよ。「私たちは食べる時によく噛みます。よく噛むとツバがたくさん出るんです。ツバには食べ物を小さくする力だけでなく、バイキンをやっつける力があ

るから、私たちはよく噛むと健康になれるんです。だから一生懸命食べるんです」と言ったんですよ。

皆さん、これ知っていましたか？これがむちゃくちゃ大事なんです。インフルエンザにかかりたくなければ、よく噛んでください。唾液をたくさん出すことは、もの凄く重要だと知っているんです。唾液の中にはウイルスをやっつけるいろんな成分が含まれていて、そういうのをやっつけるっていうことを知っていたんです。

「ほ～」と感心して聞いていました、「すごいね」と。でも、まだ言うんですよ。「しかも」と言うんですよ、2年生の子が。

「しかも、私たちは一生懸命噛むと、顔の筋肉や神経がよく刺激されるんです。だから学校の勉強によくついていけるようになるんです」と言ったんです。これにはもうびっくりですよ。今から私が話そうと思っていることを、もうすでに2年生の女の子が知っているんですよ。

「は～今から私が話そうと思っていること、あなたは知っているんだね」というと「はい」と言いました。後で授業が終わって校長先生に「あの子、凄かったですね」と言ったら、校長先生が言われました。「あの子はちょっと特別なんです」。利発でとにかく好奇心があって、たくさんいろんなことを大人に聞く。聞いてばかりで大人を質問攻め。その中に実は学校に出入りされている歯医者さんがおられるんですね。校医さんです。その歯医者さんをつかまえて、「先生、私、歯のことについて知りたいから、もっと教えて」としよっちゅう聞いていたらしいんです。それで、その歯医者さん、歯の先生が噛むことの大切さとかをその子にちゃんと伝えていた。それを全部スポンジのように吸収していたんです。それをそのまま私に伝えてくれた。発表したくてたまらなかった。もう、びっくりでしたよ。

その時に私が思ったのは、「ああ、やっぱりそうなんだ」と思いました。それは何かと言うと、やっぱり子どもは大人が作る環境によって育っていくんだ、ということを実感しました。小学生が18人しかないような地域ですから、たぶんその子どもたちは大人との距離がもの凄く近いんですよ。普段から地域の大人たちと色々交流しながら、あるいは地域の方が学校にしよっちゅう出入りされている。あるいは、そういう地域だから三世帯とかそういう家庭もあって、いつも、例えば学校の中でそういう話をされたり、食卓でそういう話をしたり、そういうのがたくさんあって、普段からそういう話を聞いているから子どもがそのまま吸収して、そのまま大人の言葉で語ってくれる、ということなんですね。

教育ってこういうことだと思います。皆さんPTAの関係者ですけれども、皆さんの背中を見て子どもたちは育っていきます。皆さんたちがやっていることの真似をします。皆さんたちが普段やっていることを見て、あれは大人になったらやってもいいんだと思いながら育っていきます。やらなきゃいけないんだというふうに思って育っていきます。善くも悪くも大人の作る環境で子どもたちは育っていくということを、私たちは必ずよく知っておかなければいけない。食べることに言え、基本、「何故食べるのか」の答えはこれしかないんです。とにかく食べなければ死んでしまうということは、皆さんよくご存じで、でもそういう飢餓体験ってなかなかできなかったから、普段そういう気持ちにはなれないんですね。

例えば今日、皆さん朝ご飯食べられました？それからお昼ごはんを食べられました？食べられましたよね。早寝・早起き・朝ご飯運動とか言っておきながら、朝ご飯を食べないなんてダメですよ。食べた時に、多分「いただきます」とおっしゃったと思うんですけれども、その時に「ああ、私これをいただいたから、この命に支えられて今日一日ちゃんと生きていける」というふうに、本当に感謝しながら食べた人はどれくらいおられますか？自信を持って手を挙げてくださいね。

でもね、そうなんです。あまりにも食べることが当たり前にな



り過ぎて、そういう気持ちすら起こら

ない忙しさというのが多分皆さんにあると思うんです。だからこそ「食べることは、生きること」。私たちは生きるために食べているんだ、逆に言うと、食べ方をおろそかにすると、私たちは命を大事にしていけないということと一緒に考えていかなきゃいけない、そう思っています。

私がそういうふうと思うようになったきっかけは、先ほども申しましたように、いつも話している大学生たちの暮らしぶりを見ていて、こういうことはやっぱり大学でもちゃんと教えなきゃいけないんだな、ということからでした。学問のことだけではなくて、大学生がやがて大人になって社会人になった時に、社会人として、一人の大人として、ちゃんと生きていけるような術とか知恵を授けていくことも大学の教育の役割だろうと、今思っています。そのきっかけがこれでした。

今、どこの小学校・中学校でも「早寝・早起き・朝ご飯」運動をやるようになりました。朝ご飯をちゃんと食べてくるんだよと。うちの学校は大体9割以上の子、あるいは100%近くの子が朝ご飯を食べてくるようにしましょう、ということをしてPTAが頑張ってるんですよ。こういうことをやってきた世代が今は大学生になっています。つまり、そういう経験をした大学生たちがどんなふうになったかというのを見られるんです。

大学生にこういう質問をします。「次の授業に使いたいので、昨日から今日までに食べた物を全部、出席カードの裏にリストアップしてください。ひとつ残らず書いてください。間食も含めて、昨日から今日までの間に体の中に入ったものを全部書いてください。」これをこの授業でやりました。

「いつ、どこで、何を、誰と（何人で）食べたか?」。男子学生4人です。朝・昼・晩、どこで、何人いて、何品、何を食べたか?一番上からいきましょうか。『朝、食べませんでした。』この調査を始めて約6年経ちましたけれども、朝食食べてこない大学生は全体の40%です。「早寝・早起き・朝ご飯」運動って何だったんだろうって思いますよね。これを毎年やっているんですけども、毎年割合変わらないです。知り合いの先生がいろんな大学にいますけれども、ひどい大学になると朝ご飯の摂取率は20%以下らしいです。それも福祉とか看護をやっている大学の話です。そんな状態で、自分の健康が保てるんだろうかという話ですよ。それで、お昼からやっと食べ始め、サンドイッチを食べて、ドライソーセージを食べて一日が終わりましたと。すごいですね。この中に大学生のお子さんをお持ちの方もおられるかもしれませんが、遠くにやっていらっしゃって一人暮らしをしているようなお子さんをお持ちの方は、今度ちょっと聞いてみてください。「どんな食事をしと一と」と。

今の現代人の食べ方の特徴は、その人が食べているものをリストアップしてもどこの人かよく分からないということです。この前、小学6年生がうちの大学に来て私の授業を受けたんですけども、「このお兄ちゃん何人（なにじん）かな」と聞いたんですよ。一人の男子学生…、『ドーナツ、坦々麺、餃子』ですよ。小学生は言いましたよ。「中国人」って。「だと思うでしょう。でもね、この授業はね、日本人



しか受けてなかったんだよ」という話をしたんですよ。だから、私たちは本来和食を食べる日本人なのに和食を食べない人が増えているんですね、という話なんです。

今、和食の話が出ましたけれども、世界無形文化遺産に登録されましたね。でも、喜んでいる場合じゃないんですよ、本当に。これ見て分かるんですが、味噌汁が出てこないんですよ。大学生の味噌汁摂取率は、私の調査では実は13%だから、大体10回食べて1回

出てくるくらいですよ。大学生の食べ物で味噌汁が登場するのは、10食食べてやっと1回出てくるんです。もう味噌汁は遺産どころか出てこない、絶滅危惧種です。遺産というのは、受け継ぐ人がいて初めて遺産ですからね。ですよ。受け継ぐ人が育っていないんですよ。出汁を取ることができない子どもがいっぱいいますし、味噌汁と言われれば顆粒出汁溶いてとか、顆粒のものを溶いてちょっと混ぜればできるんでしょ、そういうふうに思っている人もいっぱいいますからね、そんな状況です。

なぜこうなるのか？今日考えていただきたい。若い人たち、大学生はなぜこうなってしまうのか？これだけ覚えて帰ってください。答えはたった一つです。「自炊をしない」んじゃないくて、「自炊ができない」んです。これだけです。

今、スポーツの教育がもの凄く盛んなんですけど、スポーツも料理も全く一緒だと私は思っています。だって、繰り返し練習しないと上達しないんですよ。スポーツが上手になろうと思ったら、上手なプレーヤーの姿を見て、その選手のやっていることのまねをして、それを毎日毎日、同じようなことを繰り返して行って、少しずつ上達していくのがスポーツの王道ですよ。全く一緒です。料理だっていきなりはできません。18年間何もやらなくて、そのまま大学に入って一人暮らしをしたら、できないのは当たり前です。これを18年間ちゃんと毎日、日々の中でお手伝いをするなど繰り返していたら、ちゃんとできるようになるはずなんです。だけど、今それができていない家庭が凄く増えている。これ自体が今一番大きな問題で、さっきのように味噌汁を受け継げないなど、そういうことが増えているんだろうと思います。ここをどうにかやっていかなきゃいけない。私は、是非皆さんには「うちの子は、大学にやっても大丈夫。いつ一人暮らしをしても大丈夫」というふうに言っていたきたいんです。そういう子育てを、是非今の間にしていただきたいと思っています。

食べ物を考える時に大切な視点として、「体にいいものを食べているか」とか「朝食を食べているか」とか、そういうことももの凄く大切なんです。大切なんですけど、それ以外にも大切なことがあるということを知っていただきたいんです。「食」だけを考えるのではなくて、その「食」でどんなことが育っていくのかということを考えていただきたいのです。

小学6年生で朝食を食べない、または、一人で食べている子どもたちが増えています。週3日から6日間、一人で食べるという子を合わせると27%の子どもたちが朝から一人でご飯を食べています。この状況は、片親の家庭や共働きの家庭が増えたから仕方がないんです、と言う人たちもいます。そういう解説をする人たちもいますが、それは大人の言い訳です。私はそう思います。何故か？それは、私も共働きです。妻も働いています。私は今帰りが遅いです。私もPTAをやっていたという話をしましたが、そうすると夜、家族で一緒にご飯を食べる時間がなくなるんですよ。これはいかんと思いました。一日1回くらいは、家族でちゃんと食卓について一家団欒で語り合って、子どもの今日あった出来事とか聞きたい、こっちもいろんなことを話したい。家族の会話がなくなってしまうのはいかん、それで朝しかない。子どもが2人いるんですが、当時小学生と保育園の年長さんの娘でしたが、二人を呼んでこう言いました。

「今からお父さんは、あなたたちに大切なことを伝えます。よく聞いて。おばあちゃんからお父さんがいつも言われていた言葉をあなたたちに伝えますから、そのまま守ってください。『働かざる者、食うべからず』、お手伝いをしない子には、うちでは絶対食べさせないようにします。だからご飯を食べる時に料理はできなくてもいいけれど、お箸を並べたり、茶碗を並べたり、そういうことをちゃんとやってください。それから、お姉ちゃんは今小学生になったんだから、茶碗くらいは洗えるから自分の分は





ちゃんと洗ってください。家族の分も洗ってください。その代わり、お父さんとお母さんは一生懸命料理を作るから。そうやって役割分担をしよう。朝、叩き起こすからね。」

そう言って、朝叩き起こして、ちゃんとお手伝いをさせました。そうすると、家族は自動的に朝から一緒にご飯を食べることになります。皆で「いってきます」を言うことができます。これを大人がサボっているんです。たったそれだけなんです。

最近は一人で食べたがる人たちがいます。子どもの頃の食卓自体が楽しい食卓だったら、こういうことにはならないんじゃないかと思うんですけども、そういう人たちが増えているということは何かが起こっているんだろうと思います。

一つはですね、残食の問題なんです。学校給食の現場を、PTA役員の方々に見せていただきました。その時にやっぱりこの状況を見てショックを受けました。子どもたちがこうやって平気で食べ物を残していくことができるということを見た時に、これは何とかしなきゃいけないと思いました。特に私がショックを受けたことは、この子どもたちが捨てた残食を毎日のように計量されている学校の先生・調理員さんがおられたということを知った時です。自分の子どもたちのせいで、この方たちにこんなことをさせていたんだ、ということに気づきました。皆さん、この方たちの気持ちになって考えてみてください。もし皆さんがこの仕事だったとして、毎日こんなことをしたいですか、ですよ。いつか0（ゼロ）になるんじゃないかということを期待しながら、毎日のように考えながらやるんですよ。何ヶ月も前から子どもたちの体のことを考えて、栄養バランスを考えて、食材の調達方法を考えて、30日間の細かい献立を作って、一枚一枚家庭に配付して、そして調理方法まで研究して、これだったら、この味付けだったらいけるだろうということまでやって提供したにもかかわらず、こんなふうになってしまっているという現実があります。

残食を0にするということは重要だと思います。これは全部、命です。命です。命です。このお米を作った農家さんがこれを見たらどう思うか、これを命がけで獲ってきた漁師さんがこれを見たらどう思うか、ということが子どもたちに見えるように伝えなければいけません。これができていないんですよ。これに罪悪感を感じるような子育てを是非やりたいです。

中には、色々と凄く努力されている学校があるというのが分かってきました。色々調べていって行き当たったのがこの学校だったんです。自分たちが食べている給食で、配膳の時に誤って床に落としたようなおかずしか返ってこない状況。ほとんど完食。99%完食。

この子たちはさっきの子たちと何が違うのかということ、この学校は毎月1回のペースで自分たちでお弁当を作ってきて、それを学校で皆と一緒に食べるという活動をしています。これを最初に大学生から紹介してもらった時、最初は意味が分らなかったんです。単に調理技術をアップしているのかなと思ったんですけども、全然違いました。料理には、自分でやった人しか分からない世界があるということを教えてくれました。

今の人たちは皆、子どもたちも含め食べる方の専門家になってしまって、作る方に回らないから全然気づけない世界があるんですよ。作って初めて分かる世界があるっていうことに気づくためには、自分で作る体験をたくさんさせるということが重要なんです。これを弁当でやるんです。5年生・6年生で家庭科の授業があって、その授業と並行させて弁当作りもできるように、先生方も一生懸命指導されます。10月から2月まで月1回のペースで年5回、自分で弁当を作ってくる日を設けたんです。この取り組みが2001年（平成13年）から始まった「弁当の日」という取り組みでした。

弁当の日の取り組みは、結局のところ、食べ物の向こう側をちゃんと見つめられるようになりましょ

う、食べ物を見るんじゃなくて、食べ物の向こうに繋がっている世界を分かるようになってほしい、という取り組みでした。

私の授業では、授業がある前のお昼休みの時間に、
自

分たちでおかずを一品だけでいいから持ってきて、皆でお昼に集まって食べようというふうにしています。そうすると、皆こうやって一品ずつ持ってくるんです。でもですね、やっぱりほとんどの子たちが初めて作るから、もの凄く不安な状態で持ってくるんです。

これは第1回目の弁当会です。大体、春なんです。1学期の1番目ってこんな感じなんです。皆こうやって「いただきます」と言いながら、あることを心の中で思っています。何を思っているか分かりますか。料理が苦手な子が一生懸命作ってきて思うこと。作った人なら分かりますけど、自分の作った一品をちゃんと皆が完食してくれるか、これしか考えていないんですよ。だってですよ、この状態で自分のおかずだけがポツンと残ってですよ、皆のが空になった状態、想像したくないですよ。『やっぱりダメだったんだ。俺ってダメだな、できない奴だな』と、そんな思いはしたくないんです。だから皆お互いにそう思っているから、「いただきます」が終わったら、皆褒め合いになるんですよ、本当に。

「あなたの作ったの美味しそうよね。彩りもいいよね。レシピどこで習ったと？教えてよ」と言いながら、横目でチラッと自分のおかずには手が伸びているかどうか、確認するんです。皆必ずそれをやるんですよ。それをやって、お弁当食べ終わって、次の授業に行く間にですね、いろんなことを考えるんですよ。

「食べてもらうことが本当に嬉しかった。ありがたいと思った、本当にありがとう」と思いながら、自分は親にそういう気持ち伝えたことがあるだろうか、ということなんです。お母さんが毎日のように自分より早く起きて、朝課外のために朝4時・5時に起きて自分のお弁当を毎日作ってくれたことに対して、高校の時まで一言もお礼を言ってなかったということに気づくんです。それで携帯電話を取り出して、次の授業に向かいながら「お母さん、今までお弁当ありがとう」と電話するんですよ。本当です。

男子学生は謝罪ですね。「俺、こんなの嫌いだって言ったじゃないか、なんで入れるんだよ、弁当に」とか、「汁物は入れるなって言ったじゃないか。鞆の中がぐちゃぐちゃになっただろ」とか、さんざん悪態ついてきて、「そういう自分をとても恥ずかしいと思いました」と次の授業の時に感想を言いました。

「そんなことをやってきた自分は全然大人じゃないと思いました」と感想を言いました。「あの弁当の日で自分が気づいたことはそういうことでした」と大学生が言うんです。小学生ならなおさら、いろんなことに気づきます。どんなに調理員さんが苦勞して作ってくれるか、どんなにお母さんが自分たちのことを思ってやってくれていたかということに気づいて、残せなくなっちゃうんです。味ではなくて気持ちで、心で食べるようになってくれるというのが分かってきました。料理は心を育てるんです。

教えてくれる人がいるなら是非自分も習いたい。子どもたちは皆思っています。特に小さい子、幼い子は台所が好きです。ですから、そういう幼いお子さんをお持ちの方は、是非今のうちに「台所に来ていいよ」「手伝って」と呼んでほしいんです。その時間は必ずその子の財産になるので、是非伝えていただきたいですね。

私が最初に弁当の日をやったのは学童保育の中で、実はいろんな出来事がありました。皆さんに今日そのことを伝えたかったんですけども、学童保育ってやはり共働きの家庭とか片親の家庭とか、そういう子どもたちがたくさんいるので、親たちがとても忙しいんです。その忙しい中で私が「子どもたちにお弁当を作らせましょう」と提案したら、本当に反対されました。大ブーイングでした。けれどもちゃんと説明しました。「忙しいから作らせるんです。早くに自分で料理が作れるようになって、自分で自



立して『お父さん・お母さん、忙しいんだったら、私が作っとうちああよ』と言ってくれるようになったら、こんなに楽なことはないじゃないですか。家族の一員なんだから。そういう状態にすれば、私たち自身が楽になれる」と。そういうふうに伝えたらかなりの方が、役員の方たちもかなり賛成してくださいました。

私たち、子どもたちより先にいなくなるんですよ。その子どもたちに何を残していくのかということ、いろいろ考えなければいけないですね。私の知り合いなんですけれども、この子はですね、ガンを患ったお母さんがいて、お母さんから味噌汁の作り方、出汁の取り方からちゃんと習って、5歳の時にですね、その言いつけを今も守って5年生になりました。自分の命は自分で守るのよ、と伝えられた教を今でもちゃんと実践しています。これが伝承です。これが遺産です。

そのハナちゃんが九大に来て、大学生たちに味噌汁の作り方を教えてくれました。伝承しているんです。年齢は関係ないんです。条件は、分かっている人が教えたらいいいんです。皆さんたちだって、今からだって、学ぶことができます。知らないんだったら、是非子どもさんと一緒に学んでください。私もそうしました。

今日、ここで聞いた話が本当によかったと思ったら、是非ここだけで終わらせないでください。今日から何か一つでもいいから始めていただきたいと思います。

実は弁当の日の実践校ですね、今 1400 校くらいあるんですけれども、九州がダントツなんですよ。私は、これは P T A の取り組みだと思っています。学校だけじゃできないんですよ。子どもが家庭で料理をしなきゃいけないんで、家庭の協力が必要な取り組みなんです。是非、P T A で力を合わせてやっていただきたいと思います。私からのエールです。

最後に、学童で起こった出来事を皆さんにお伝えします。父子家庭の子がいてですね、その父子家庭の子が困っちゃったんですね。お兄ちゃんの方が弁当の日になると「家に帰って食べる」と言いだしちゃったんですね。先生が「どうしましょうか」と私に相談に来られたから、分かりましたと言って、あることをしてください、とお伝えしました。そのことも含めて、私のメッセージも含めて、最後にスライドショーを皆さんにお見せします。

こういう子が可哀想だと思わないでください。この子たちが一生幸せになるためには、今この時期に自分でちゃんと自立して生活できる術を大人が伝えてあげることが重要なんです。弁当の日を設定することが可哀想なんじゃなくて、弁当の日でこうやっていろんなことを身につけていってくれることが、やがてこの子たちの将来をハッピーにしてくれるというふうに、私は信じています。その思いを込めて、最後にこんなスライドショーをして、私の話を終わりたいと思います。



少し長くなりましたが、私の話をこれで終わりたいと思います。ありがとうございました。